

弱い政党システムのもとでの党派性の形成

——現代フィリピンのリベラル派、急進左派、ドゥテルテ支持派——

Partisanship under a Weak Party System: Liberals, the Radical Left, and Duterte Supporters in the Contemporary Philippines

瀬名波 栄志 東北大学大学院文学研究科 PD（特任研究員）

SENAHA Eishi Postdoctoral Fellow (Specially Appointed Researcher), Graduate School of Arts and Letters,
Tohoku University

要旨

フィリピンでは政党政治が十分に機能していないと指摘されてきた（Kasuya 2007; Arugay and Slater 2019; Kasuya and Teehankee 2020; Kenny 2020）。政党が機能しないとき、党派性はどこで、どのように作られるのか。2025 年 9 月 21 日、治水事業予算をめぐる汚職疑惑を受けて、マニラ首都圏ではリベラル派（教会系を含む）、急進左派、ドゥテルテ支持派の三陣営が街頭に出た。三陣営は、フィリピンに民主化をもたらした 1986 年のピープルパワー革命が残した「人民が平和的な動員によって腐敗した権力者を退ける」という文法（主語・動詞・目的語）を共有し、腐敗した公職者の処罰を求めた。それでも三陣営は、エドサ、ルネタ公園、リワサン・ボニファシオに会場を分け、連携しなかった。

本報告は、三陣営が互いの境界を引く実践を分析する。2024～26 年の調査（ドゥテルテ支持派のインフルエンサー 5 名への半構造化インタビュー、2026 年 3 月の集会での街頭インタビュー 19 件、反汚職デモ参加者へのインタビュー 106 件、リベラル派と急進左派の組織者 4 名へのインタビューなど）によれば、陣営の区別は五つの手段によってなされていた。具体的には、包含的な「私たち」（tayo）と排除的な「私たち」（kami）の使い分け、「平和的で、金で動員されていない」という語り、誰と行動を共にするかの宣言、目的語の選択、集会の場所と日付の選択である。

Tilly (2004) は、既存の境界が特定の出会いの場で際立たされることを「活性化」と呼んだが、何がそれを担うのかは述べていない。本報告は、党派性の形成が政党からのトップダウンではなく、対抗する三陣営が五つの手段で互いの境界を活性化する、メゾレベルの共同作業であると主張する。